

3. 災害から復興まで

豊丘村豊丘中學校三年 E・H

あれは、中学に入学して、まむない。六月二十六・二十七・二十八日のことだった。

その日は、すごい土砂降りぞ、皆びくびくして、勉強していた。すると、緊急放送があり、

「今降っている雨は、これから、ますます、強くなる恐れがあります。と連絡があったので、授業を中断して、部落ごとに、かたまっ帰ってきました。家に帰っても、やみどうもなく、なお降り続いていた。父母は、水の捌け口を、捌けを良くしました。」

夕方になつても、なお降り続けていた。河原の人達は、天竜川の増水で、堤防が、切れそうになつたので、土砂降りの中を、私の家まで、避難してきた。夕食は、河原の人達と、一緒だったのだ、大へん力強かった。夕食後、少したつと、ズズズズ、ドツシャーんと、すごい響の音がした。今まで、聞いたことのない音だったのだ、今でも、耳から、離れることができない。聞いたことのない音に、わかつた事だが、そのすごい音は、十五メートルにもおよぶ、山くずれだった。

この夜は、おびえましまつて、なかなか、眠れなかつた。うろうろとしまいと、家の中が、がたがたしたり、有線放送で、しきりに放送しまいた。

「古畑部落は、山崩れの恐れがあるから、避難しま下さい。」

との連絡であつたので、ローソク一本の暗がりの中で、ズボンをはいて、家の人達と、一列になつて、雨の中を、あぶ川の親類へにげまいった。

夜は、あぶ川が切れるとか、天竜川の堤防がきれたとかで、夜中中、消防団員は、もちろせん、一般の人達も、一睡もできなかつた。その時、私の家の田んぼは、全奇流されてしまつた。

翌朝、私は、このことを耳にして、悲壮な思いで、これから、どやうな生活していかば良いのか、とほうにくれましまつた。

どれから、天竜川の、はんらんの後を見に行つた。沢山の濁流が、ものすごいいきおいで、ゴウゴウと流れていった。どして、堤防が切れ、以前家のあつたところへも、水が、すごい勢いで、流れていった。その時私は、水の力は、たい

へん恐しいものなのだなあとつくづく感じた。

あれこれして、いるうちに、雨が止み、晴れてきたので、家に帰ってきた。

次の朝、古城へ、ヒバリがいったへ地水れかした」といううわさが流れたの

で、再びあぶ川の親類へ避難したのだが、それは、流言飛語であった。

どのうちに、あぶ川が切れどうだと言っていたので、今度は家にもどってきた。

あれこれと、色々の心配をしたが、災害の結果は、無残にも、堤防が切れたため、田畑、人家が流され、どしどし、土砂くず水があり、どしどし、尊い人命までも奪っていった。

私の家は、七反歩の田んぼが、後影もなく白河原になっちゃった。流された時、私運子供には、寂しく、つまらない気持があったが、さほど悲しまなかった。しかし、おとなの人達は、家族を養っていかねばならない義務から、本当に、真剣な問題であった。どしどし、田んぼは、流された人達同志で、相談して、田作りを計画した。

それから、半月ばかりして、復旧工事が、着々と進められた。土方の人達が、ガンブカーで、山から土を運び、私の知らない間にできあがっちゃっちゃった。私はどの早さに驚き、機械化の進んだことに、感謝した。

でき上った田んぼは、今までのと違い、蒼ばんの目のようになり、川も道も

広くなり、合理的になった。

「災害は、忘れた頃に、又、やっまくる」という、ことわざのようには、再び

このような災害にであゆまないようねがい、又、皆で対策を考え、大きな災害を
防げたら、どんなに守心して、暮せることでしょう。

(三十八年)